

週日の説教

金 大烈 神父 2011年6月29日(水)

《恥は神様の所に行くための通路》

皆様、よく眠れましたか。暑くてよく眠れなくて夜が怖いですよ（笑）

今日は聖ペトロ、聖パウロ使徒のお祝い日です。この二人の聖人についてはこの前に色々と説明をさせて頂きました。

さあ、皆様「恥」という言葉がありますね「恥」。「恥」は大体私たちが人にはあまり見せたくないことですよね。ということは隠したい。それが普通の人間の心でしょう。私の「恥」を皆さんに知らせたいという気持ちの人はいらっしゃるのでしょうか。「恥」はやはり隠したい気持ちになりますよね。さあ、「私は隠したい恥は何一つありません。」と言えるでしょうか。「恥」は皆持っています。しかし、「恥」は出来るだけ隠して死ぬ時まで出来るだけ自分の袋に入れて置きたい。見せたくない。これはある意味では本能的な心の働きかも知れません。

三浦綾子と言う作家を皆様ご存じだと思います。彼女は闘病生活の中で洗礼を受けた人でしたね。洗礼を受けてからの彼女の小説の方向が180度変わったと言われています。イエス様と同じ向きになって、靈魂とか生と死についてよく黙想した後、書いた小説がほとんどだそうです。とにかくはっきりと覚えてはいないのですが「光と愛と命」という小説があります。その中にはこのように書かれています。「聖書は本当に正直な本である。大体自分の歴史、過去を書こうとする時に、どうにか美化して美しく表現しようとするのが当たり前なのに、聖書はありのまま、おせじが全くなく率直に表している」そして彼女が言っているのは、「私は聖書を通して光の世界に行こうとこれから頑張ります」という内容がありました。

聖ペトロ、聖パウロ使徒のことを考えても、やはり聖書も一つの歴史の本と言えるでしょう。そして初代教会、初めてカトリックのキリスト教の共同体が作られた時、その頭としてのペトロの立場でも権威が必要だったのでしょう。人間ですからカッコいいことだけ見せたかったと思います。パウロも同じです。パウロも宣教の頭として色々な共同体を導く立場で、イエス様を信じている人を殺そうとして頑張ってきたとか、そういう言い方はされなくなかったのでしょうか。しかし、聖書はどこを見てもありのまま、恥ずかしいところも全部書いてあるのです。そういうことを見て私たちが考えなくてはいけないことは、ある意味で「恥」は弱さから出ます。「恥」は死ぬ立場の人には感謝すべきものではないかと思います。感謝以外の何物でもないでしょう。

聖ペトロと聖パウロ使徒の二人には共通点が一つあります。それは「恥」のために神様を選んだことです。そしてそのためにイエス様に出会って「恥」を誇った人です。

皆様、私たちもそういう意味で本当に自分の弱さ、自分の「恥」、そういったことを通してイエス様に出会わなければと思います。その「恥」こそ、神様の所に行く通路になると私は思います。

その「恥」を認めなくては絶対神様の愛を感じる事が出来ないと思います。そういう意味でパウロは「私はこの恥を誇ります」と同胞に叫んだのではないのでしょうか。しかし、未熟な人はいつも隠そうとしています。知らないことについてよく知っているような顔をしています。怖がりな者は、私は全く怖がりではありませんと、ちょっとオーバーに自分を表そうとします。それは全く逆の反応です。そういう意味で、私たちが人間として持っているその弱さをどのように受け取るかによって、正しい信仰の生活、霊的な生活が出来るかが決まるのではないのでしょうか。

私も沢山隠している「恥」があると思います。多分皆様も同じでしょう。しかし、これは神様のためには、ありのまま自分のことを認めるためには、生と死を認めるためにも、宝物かも知れないことを感謝しましょう。

ありがとうございました。